
師弟の絆

浮き雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

師弟の絆

【コード】

N0960H

【作者名】

浮き雲

【あらすじ】

凄腕ヒットマンへの新たな依頼は、キャバッローネ10代目、デイーノの暗殺だった！？

プロローグ（前書き）

この話は、J BOOKS『家庭教師ヒットマンREBORN！
隠し弾1 骸・幻想』の『跳ね馬爆走！』を読んではないと分
からない部分がありますが、読んでいなくても、物語に支障はありませ
ん。

プロローグ

「……キャバツローネファミリー？」

高級そうなソファに腰掛けた男は、同じく机を挟んだ向かい側のソファに腰掛ける男の言葉を繰り返す。

「その10代目ボスを殺れと……？」

「はい……。貴方の『殺し屋』としての腕を見込んで……」

そう……。彼は殺し屋だ。世界でも指折りの腕を持つ彼だが、高額な報酬の依頼しか承けないことでも有名だった。

「しかし何故、奴を狙う？あまり悪い噂は聞かないが……」

「奴の部下が、悪事を揉み消しているだけです。裏では、どれほどの血が流れた事か……！」

少し興奮気味に話す依頼人。

「悪事……？」

「……あまり、詳しくは話せないのですが……特別に一つだけ……」
依頼人は一旦言葉を切ると、少し間を置いて言った。

「奴は……9代目、つまり、奴の父親を、自らの手で葬ったそうです……」

「……なるほどな」

彼は気付いていた。依頼人の態度が極端にわざとらしい。

こんな依頼人は何度も見た事がある。

大体は、標的に悪い所がなく、殺しの理由に困った場合だった。

どこまで本当なのか分からない。

しかし、彼に依頼するのに理由は必要ない。

必要なのは、標的の名と、彼を満足させる報酬だけだ。

「それで？報酬の額は……？」

「はい……」

依頼人は、足元のスーツケースを机の上に置いた。

当然、中身は札束だった。1億円はあるだろう。

「依頼を承けて下さるのなら、この1億円は今、この場で差し上げます。仕事が成功すれば、さらにこの10倍の報酬を支払います。」

計11億円。

「……了解した。必ず、成功させよう」

予想を超える金額だった。もちろん、断るわけがない。

「ありがとうございます、Mr・ハレン。申し遅れましたが、わたしはムデイと申します。」

「そうか。ムデイ、この契約書にサインをしてくれ」

ムデイは、サインをすると、別の鞆から出したファイルを差し出しながら言った。

「わたしなりに、ターゲットの事を調べてきました。信頼性は保証します。参考にしてください」

「それは助かる」

ハレンはファイルを受け取った。

「それでは……。宜しくお願ひします、Mr・ハレン……」

標的1 師弟来る！

並盛中学校の屋上。

その一番高い場所に座った雲雀は、校庭で体育の授業をしている生徒たちを見下ろしていた。

その時、突然屋上へと続くドアが開いた。

「……何の用だい？」

中から出て来た人物を見て、不機嫌そうに言う雲雀。

「いきなりそれはないだろ？オレは恭弥の家庭教師なんだぜ？」

金髪に鳶色の目の青年……デイーノだった。

「……つたく、お前は成績より態度が問題なんだよな……」

口ではそう言いながらも、デイーノの表情はいつもの明るく、優しい笑顔だった。

そしてデイーノは、雲雀の足元から降りている梯子に手を掛け、登り始めた。

「家庭教師なんて、頼んだ覚えはないよ。それに……」

雲雀がそう言った次の瞬間、

「うわああ！！」

足を踏み外したデイーノは、見事に梯子から落下した。

「いてて……」

「……今のあなたを咬み殺しても、つまらないからね」

「はは……。さっきツナと話したら、ロマーリオたちとはぐれちゃったんだ……」

デイーノはやっと梯子を登り切り、雲雀の横に座った。

「……どうやって屋上に上がったんだい？……草壁が見張っていたはずんだけど……」

「『恭弥の家庭教師だ』つつつたら、簡単に入れてくれたぜ？」

「……………咬み殺す……………」

殺気と共にトンファーを構える雲雀。

「まあまあ、許してやれよ。ヴァリアー戦の時にオレの顔を見てるだろうし、オレがマフィアのボスだからってこともあるんだろっぜ」

「……………」

雲雀は静かにトンファーを下ろした。

「……………ヴァリアーとの戦いは終わったよ。もう家庭教師なんて、必要ない」

「そういうワケにはいかねーな」

デイーノは、真面目な顔で雲雀の指に光るボンゴレリングを見た。

「お前は将来、必ずボンゴレの大きな戦力となる。そのためにも、もつと鍛えなきゃならねーし、マフィアとしての最低限の知識も、教え込むつもりだ」

「……………興味ないな」

「なっ……………！」

デイーノにとって精一杯の真面目な話を一言で片付けられ、少しムカツとするが、すぐにいつもの笑顔に戻るデイーノ。

「……………やっぱり恭弥は恭弥だな。でも、お前がなんと云おうと、ピシバシ鍛えるから覚悟しろよ」

デイーノの言葉が終わると同時に、再び屋上のドアが開いた。

「ボス！ やっぱりここにいたのか……………」

ロマーリオは急いだ様子で2人の方に近づいてきた。

「ボス！ そろそろ戻らねーと、仕事に間に合わなくなるぜ！」

「わあつてるよ！」

これから待っている嫌な仕事の事を思い出し、若干不機嫌になるデイーノ。しかし、ワガママを言っている暇はない。仕方ねーな、と渋々立ち上がった。

「じゃあな、恭弥！ また来るぜ」

デイーノはそう言つと、軽くジャンプして、一段下のロマーリオ

の前で綺麗に着地した。

それは、先ほど梯子から転落していた姿からは、想像もつかないほど華麗だった。

そんな彼がロマーリオと共に屋上を出て行くのを、雲雀は冷ややかな目で見送っていた。

標的 2 並森来る！

「……………」
デイーノ暗殺の依頼を承け、早くも一週間。

殺し屋ハレンは、今までに無いほど悩んでいた。

「……………一体、どうしろと言うんだ……………」

手の中にあるターゲットの写真。これを手に入れるだけでもかなり苦労した。

しかも、遠くから隠し撮りしたものを引き延ばしているので画像も粗い。

……………いや、写真が手に入っただけでも進展した方だ。

依頼人のムデイが集めて来た情報は、ハレンにとって何の役にも立たなかった。

好きな食べ物がなんだとか、子供や民間人に優しいだとか……………キヤバツローネファミリーのある町の子供たちに聞いたようだが、それがどうした！

そんなくだらない事だけで、よくファイル一冊を埋めることが出来たなど逆に感心する。

念のため全部読んだが、とんだ時間のムダだった。大体、大切なボスの情報を簡単に外部に漏らすファミリーがどこにある!?

仕方なくハレンは、キヤバツローネと敵対するマフィアから情報を集めていた。

少なくとも、ムデイの情報よりはまともだった。

やはり詳しい事は分からなかったが、何かの役には立つだろう……………。

普段は『跳ね馬』と呼ばれるディーノだが、どうやら昔の『へなちよこ』に戻る瞬間があるらしい。

そこを狙えば簡単だが、残念ながらその瞬間が分からない。

……何をやっているんだ、俺は……！

世界でもトップクラスの実力を持つこの俺が、一週間経ってまだ作戦の検討もつかないなんて！

半分ヤケクソになりながらも、ハレンは情報を集めるしかなかった。なんせ、10億円もの大金がかかっているのだ。簡単に諦めるワケにはいかない。

そんな彼は今、最近ディーノが頻繁に目撃されているという『日本』の『並盛町』という所に来ていた。

しかし、肝心のディーノの居場所はわからず、住民に聞こうにも外国人であり目つきが悪いハレンが近付いただけで、足速に逃げて行ってしまうという始末。

ハレンが途方に暮れていると、ポケットの中で携帯電話が震えだした。

一応画面を見てみると、やはり今一番会いたくない人物からの着信だった。

ハレンは、携帯電話の電源を切っていなかったことを後悔した。

このまま無視してしまおうか……。

しばらく放つてみるが、バイブレーションが止まる気配はない。

仕方なくハレンは携帯電話の通話ボタンを押した。

『……Mr・ハレン、お仕事中でしたか？』

ムデイの独特な喋り方は、電話を通してでも十分にハレンを苛つかせた。

「何の用だ」

『あなたに依頼した仕事の、途中経過を伺いたいと思ひまして』

「あんないい加減なファイルを資料と称して、よくそんな口が叩けるな」

『その様子では、やはり順調とはいっていないみたいですね。仕方がないではありませんか。わたしもたくさんの殺し屋に同じ依頼をしたのですが』

「……………」

『誰か一人でも成功させていれば、貴方に仕事がまわってくることもありませんでした』

ハレンは溜め息をついた。

「どうやら、俺はとんでもない仕事に手を出してしまったようだな……………」

それならこの高額報酬も領ける。

『……まさか、今さら仕事を降りたいなんて、言いませんよね？』

ムデイが試すような口調で聞いてくる。

『貴方は既に、仕事を請けるという前提で1億円を受け取っているんですよ？』

「心配するな。一度請けた仕事は必ずやり遂げる」

ハレンが答えると、ムデイは意味ありげに笑った。

『それを聞いて安心しました。それでは、よろしくお願いします』

「……………一つ訊いてもいいか」

おそらく電話を切ろうとしたであろうムデイは、ギリギリで聞こえたハレンの声に『はい？』と不思議そうに答えた。

「……………今まで仕事を頼んだ殺し屋の中に、途中で降りた奴はいるの

か？」

『いません』

ムディはきつぱりと言い切った。

『そう申し出る殺し屋はおりましたが、わたしが許しませんでした。契約というのは、そう簡単には破れないものです』

「相手は殺し屋だろう？よく無事だったな」

ハレンの口調には皮肉めいた響きが込められていたが、ムディは動じる様子がない。

『わたし一人で、あんな大金を用意できると思いますか？』

その言葉を聞いて、ハレンは背筋が冷たくなるのを感じた。

「……なるほど。じゃあもう一つ」

ハレンは嫌な予感がしていたが、聞かずにはいられなかった。

「お前の言う“失敗”とはなんだ」

『…………… そんなに構えなくても、成功させるのであれば、知らなくとも問題ないでしょう？』

ムディの態度はさつきとまるで変わらない。

ハレンには、それがかえって不気味だった。

『…………… そうですね、これだけは言っておきましょうか』

ムディの声が少し低くなった。

『この仕事に失敗した方々は、誰一人、わたしのところに帰ってはきませんでした』

「……………」

『これでいいですか？』

「…………… ああ、充分だ」

『そうですか。それでは、これで失礼します』

「ああ。もう電話はしないでくれ」

『わかりました。成功を祈っていますよ』

ハレンはムディの言葉を最後まで聞かずに電話を切った。

そして、初めて自分が冷たい汗をかいていることに気がついた。

失敗するわけにはいかないようだな……。

ハレンは携帯電話をポケットにしまうと、溜め息をついて歩きだした。

……やはり、あそこに行くしかないか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0960h/>

師弟の絆

2010年10月9日18時22分発行